

名物裂に見られる緑色染料の鑑別

氏名 : 長屋圭子
学籍番号 : 9633033
指導教官 : 道明美保子

1 研究の目的・意義

我々の祖先は古くから、植物を始め、身近にある材料を用いて繊維を染め、織物にし、自らの生活を彩ってきた。それら天然染料は、合成染料にはない、深みのある美しさがある。現存する古裂などを見ると、今なお鮮やかな色調を発しているものもあるが、これらの染料を鑑別していくことによって、伝統的染色技法に関する知見が得られ、さらに文化交流の解明に資するところが大きいと考えられる。また、一つの色に関して鑑別を進めることによって、その色に関する染料の傾向等の特色が得られるのではないだろうか。

今回、関東地方の旧家より、「名物切レ鑑」を入手することが出来たため、これを元に緑色の染料の鑑別を試みることにした。

自然界に緑色はあるふれており、緑色を染める染料はたくさんあるように思われそうだが、それらの成分はクロロフィルで、ポリフィンのマグネシウム錯塩の形をしたものであり、クロロフィルの分子内にフィトールの疎水性残基を持つために水に不溶性で、光によって Mg イオンが離脱し、変色や褪色するため、日光に極めて弱いという欠点をもち、天然染料に用いることはできなかった。一般的に緑を染めるには黄色と青色の染料を染め重ねる方法が用いられる。そんな緑色染めの他の色にはない特異性が緑色を選んだ理由である。そして複数枚の試料を鑑別することによって、どの染料が、どの程度使用されていたのが考えられる。また、名物裂は舶来品のものを含んでいる可能性が高いので、海外においての染色を考えることもできる。そ

ういった理由で、一つの裂についてすべての染料を鑑別するよりも意義深いことと考えた。

2 名物裂

2-1 名物裂とは

今日、名物裂という言葉は一般的ではないが、名物裂は美術工芸品と同様に茶の湯の世界で用いられる。室町時代に入り、茶の湯が流行するするに従いあらゆる茶道具に銘がつけられるようになった。それに伴いそれを包む仕履も名物として成立していったのである。名物裂が名物茶器から離れてその染色美を尊ぶようになったのは、江戸時代中期と考えられている。

名物裂が成立していくに従って、その研究と賞揚も大いに進行していった。その手控本がつくられ、一方で「裂手鑑」がつくられるようになった。「裂手鑑」とは古筆手鑑に準じて名物裂の片布を帖に貼り付け、名称を書き添えたもので（記入のないものもある）内容を知るに便利なだけでなく、それ自体が美術品として大いに楽しめる存在なのである。江戸時代後半には相当数の裂手鑑が造られたようで、それらかなり細片に及んでいものがあり、それだけ愛好者の需要も高かったことがわかる。今回手にする事のできた「銘物切レ鑑」も、関東地方の旧家から得られたことが分かっており、そのころつくられたものの一つであると思われる。

以上のように、「名物切レ鑑」からは数多くの試料が得られるのである。本研究ではそれを生かし、緑色布に絞って鑑別を進めることで、染料の特徴や傾向等の結果を求めるものである。

2-2 「名物切レ鑑」の添え書きの分類

前述したとおり、裂手鑑には裂の片布に名称が書き添えられている。ではこの「銘物切レ鑑」にはどのような名称が書き添えられていたのか、検証してみた。

「銘物切レ鑑」には 106 枚 (72 種) の裂が含まれており、34 の添え書きがあった。

表 1 添え書きによる分類

分類	件数
1) 名物の茶碗や茶入れの名をとったもの	
2) 有名な装束・掛幅・戸帳などの所蔵寺社名	
3) 個人愛用裂の所持者名	1
4) 裂の模様による名	2
5) 遊女、太夫の所持する衣装から出た名	1
6) 織物の品種による名	10
7) 歴史的な事象にちなんだ名	
8) その他	
不明	5
産出にちなんだ名	2
裂の組織	1
色名	4
使用目的	8

品種による名が比較的多く、物事、人にちなんで付けられる裂が少ない。

また、品種は見た目だけである程度判断できるので、書き添えやすいということもあるだろう。また、色名や使用目的が書き添えられていることが特徴的であった。

3 鑑別の方法

3-1 実験の方法

鑑別の方法としては、吸収スペクトルの測定による方法をとった。これは繊維に吸着している色素を溶媒を用いて微量の試料繊維から色素を抽出し、紫外～可視部の吸収スペクトルの測定結果を比較する方法である。

試料となる染色布より緑色の繊維を約 2 mg を採取し、DMF(dimethylformamide)による抽出とアルカリ性での抽出を行い、抽出液の吸収スベ

クトル (200~900nm) を日本分光株式会社製紫外可視分光光度計 V-550 型を使用して測定した。

なお、緑色染は二色の染め重ねという特性からか、一度の抽出で二つの染料が抽出されないのである、一つの試料につき、数回抽出を行うこととした。

3-2 試料

試料は「名物切レ鑑」に含まれる 72 種の裂の内、緑色の繊維を含む裂、23 種とした。試料番号は、表紙に近いものから順にふっていった。

3-3 対照試料

文献により、青色染料として藍が古来よりもっとも広く使用されていたため、徳島阿波のすくもを用い、ハイドロサルファイト建てで染色した藍染めの綿布を 3-1 と同様の方法で色素を抽出し、吸収スペクトル測定を行った。

黄色の染料は比較の種類が多いが、手に入った黄檗、刈安、渋木 (楊梅)、梔子、槐花、石榴、ミロバラン、グレップチップの 8 種について綿布 (中尾フィルター製 14 目付網羽二重) を染色した後、稻藁灰汁と酢酸アルミニウム水溶液でそれぞれ後媒染した。その後、未媒染布を含め、3-1 と同様に色素を抽出し、吸収スペクトル測定を行った。

対照試料となる染料をいったん染色して再び抽出するのは、染液のなかに含まれる色素成分に染着するものと、しないものがあるためである。染着した成分しか比較できないため、染着したものを抽出することとした。

4 結果と考察

図 1 は試料 22 と藍、黄檗の AI 媒染の吸収スペクトル測定の結果である。試料 22 の波形は藍のスペクトル波形の特徴である、610nm にピークを持っており、全体の波形もほぼ一致している。黄檗についても特徴的な 3 点のピークが一致しており、染料に藍と黄檗が使われていた判断した。

同様にして他の 22 種について実験を行い、対照試料との比較検討をし、鑑別を試みた。

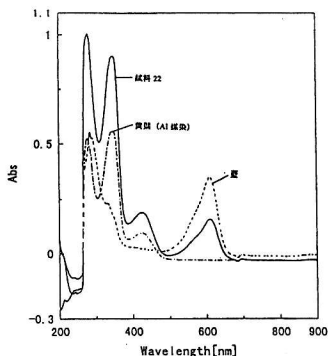


図1 試料 22 と藍、黄槿の AI 媒染の吸収スペクトル測定の結果

表 2 に緑染色布に用いられていた黄色染料植物名と媒染剤を示した。青色染料についてはすべての試料について藍が使用されていたという結果になった。青色染めといえば藍、というぐらい古来より長きにわたって、また身分を問わず用いられてきたため、予想通り結果になったと言える。藍染めは日本に限らず、世界中で広く行われていたので、船載の裂も同様に藍が使われていたと思われる。

黄色の染料は特に黄槿の使用が目立つ。「延喜式」縫殿寮雑染用度条には深緑には藍と刈安、中緑と浅緑には藍と黄槿が使用されていたことが記されている。当時から、変わらず同じ染料が用いられていたということに驚く。黄槿に含まれるペルベリンという色素は天然染料で唯一の塩基性染料で、他の染料と混合すると沈殿し、染料としての役目を果たさなくなる性質がある。黄槿の上に他の染料を重ねてもイオンの反発

表2 緑染色布に用いられていた黄色染料植物名と媒染剤

試料番号	染料植物名	媒染剤
1	石榴	AI
2	—	
3	石榴	AI
4	黄槿	AI
5	ミロバラン	灰汁
6	特定不能	特定不能
7	黄槿	AI
8	渋木	灰汁
9	渋木	灰汁
10	特定不能	特定不能
11	グレップチップ	未媒染
12	石榴	灰汁
13	黄槿	AI
14	黄槿	AI
15	黄槿	AI
16	黄槿	AI
17	黄槿	AI
18	ミロバラン	灰汁
19	黄槿	AI
20	黄槿	AI
21	黄槿	AI
22	黄槿	AI
23	黄槿	AI

され、染着しない。そういうわけで藍を掛け合わせて染める場合も、必ず黄槿を後で重ねるのである。むしろ後掛けにすると色止めのなが得られるので、そのような点からも黄槿は他の黄色染料より使用されたのかもしれない。

媒染剤は AI 媒染がほとんどを占める結果となった。どの媒染剤で発色がよいかは染料によって異なるため、AI 媒染が多いという結果は出てもらすがどの染料にも当てはまるとは言えない。今回の結果はほとんどが黄槿であったが、黄槿は媒染しなくても染まるが媒染した方がよいとされる。すべての黄槿の裂に媒染が為されていたのは、やはりこれらの使用される先がしっかりした織物だったからであろう。

図2～4は対照試料として使用した染色布を多光原分光測色計（スガ試験機株式会社製）で計測した結果である。すべての染料が未媒染、灰汁媒染、Al 媒染のそれぞれで色相が変化している。延喜式で緑色染めに使用されていたとされる黄檗、刈安はやや緑味を帯びており、染色性以外にそういった点も緑色染めに好まれた理由の一つかもしれない。また、今回鑑別できたものは、比較的くすんだ色に集中していることから、梶子のように明るく赤みを帯びているものは緑色染めには向いていないものとされていたのではないかと推測した。

主要文献

- ◇谷村顕雄他編「天然染料着色料ハンドブック」（株）光琳
- ◇「染織の美 第8号」京都書院, 1980
- ◇切畑健「日本の染織 19 名物裂」京都書院, 1994
- ◇「日本の染織 第四巻 舶載の染織」中央公論社, 1983
- ◇木村光雄「染色文化財中の染料の鑑別」（染料と薬品 第42巻 第10号）化成品工業協会, 1997
- ◇吉岡常雄「日本の色 植物染料のはなし」紫紅社, 1983

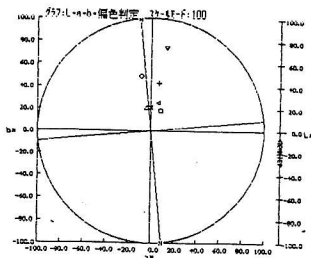


図2 対照試料（未媒染）の色差

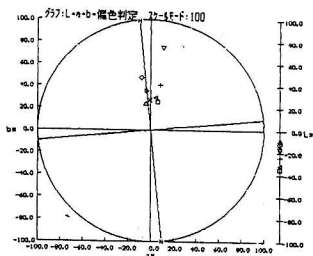


図3 対照試料（灰汁媒染）の色差

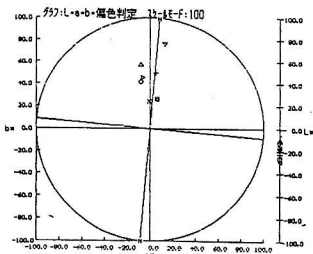


図4 対照試料（Al 媒染）の色差